

学校教育目標を問い直す(その1)

―校訓・総合的な学習の時間の目標との関係―

千葉大学教育学部 特任教授 あまがさ しげる 天笠 茂

学校教育目標の在り方について。2回にわたって探ることにしたい。

1 校訓をめぐる

学校教育目標はあっても校訓のない学校も少なくない。にもかかわらず、まずは校訓から話を始めることにしたい。多くの学校教育目標が校訓のような状態にあることに着目し、改めて、校訓との関係をとらえ、学校教育目標の在り方を探ることを本稿の課題としたい。

まず、校訓について、これは人間形成にあたってとりわけ大切にしたい教育理念や教養を成文化し、学校生活の指針としたものである。それは、たびたび変えるということではなく、長期間にわたって保持されるものが少なくない。

この校訓をもっている学校では、校訓と学校教育目標それぞれに役割を持たせて一体的に機能させているところがよくみられる。例えば、「不易」の部分在校訓に、そして、「流行」の部分を学校教育目標にといった具合に相互補完的に機能させているということである。

2 校訓の全国調査(2009年8月)

ところで、この校訓について、国による調査を一つ紹介しておきたい。2009(平成21)年8月、文部科学省校訓等を活かした学校づくり推進会議が『校訓を活かした学校づくりの在り方について(報告書)』をまとめた。ここでは、校訓を「学校で、教育上の理念・目標を成文化したもの」としておさえ、それを活かした学校経営の在り方を探るとした。

この会議は、初等中等教育局児童生徒課のもとに位置づけられものであって、校訓を中心に全国的な実態調査の実施が主な活動であった。実際のところ、事例の収集にとどまる取組は、あまり関心を持たれることもなく短期間のうちに報告書をまとめて閉じることになった。

ただ、全国から校訓を中心に関係する事例の収集は、前例のないものであって、当時の状況を知る上で、今日においても意義を有している。

その報告書について、全体でおよそ100頁を超える分量であり、構成は次のとおりである。

- (1)「校訓」を活かした学校づくりの意義
- (2)校訓を活かした学校づくりの実例
- (3)校訓を活かした学校づくりの進め方
- (4)事例編

それは、基本的な考え方をまとめた基礎編が12頁。事例編が97頁という配分になっており、そこにも報告書の性格がよく出ている。特徴は事例編にあたるところにあり、「校訓等を活かした学校づくり」を実践する小・中・高等学校の取組事例」とのタイトルのもとに、千葉県を含め各地の事例が取り上げられている。

まさに、報告書は、校訓の事例集といったもので、文部科学省より北海道から沖縄県まで全都道府県及び政令市の教育委員会に協力を求め、管下の小・中・高等学校の校訓や学校教育目標について提供されたものをまとめたものである。そこには、取組の概要とともにそれぞれ紹介した校訓の事例について理由が付されて示されている。例えば、校訓及びその理念と学校教育目標等を明確に関連付け

て学校経営に活かしている事例など、といった具合に、事例を分類・整理して一覧表にしてまとめている。

3 千葉県・千葉市の場合

ちなみに、千葉県及び千葉市については、次の学校の校訓や学校教育目標が取り上げられている。

○佐倉市立根郷小学校

校訓「進取の心」

学校教育目標「実践力のある個性豊かなたくましい児童の育成」

○市川市立妙典小学校

校訓『『あったかはあと』が育つ学校』

学校教育目標「心豊かに考えぬく子」

○匝瑳市立野榮中学校

校訓「志高く (Make Spirit Better)」

学校教育目標「豊かな心を持ち、自ら正しく判断し、行動できるたくましい生徒の育成」

○千葉県立幕張総合高等学校

校訓「独立自尊 協調親和」

教育方針「個性豊かに 心寛く 夢のある人間」

○千葉県立市原八幡高等学校

燃える something

○千葉市立緑町小学校

夢とこころざしをもち、社会に役立つ人になろうー自立と社会貢献できる子どもの育成ー

○千葉市立葛城中学校

「和敬協力」「日日新」

○千葉市立打瀬中学校

「信頼・敬愛」「自主・創造」「鍛錬・陶冶」

このように報告書は、事例を紹介するとともに、基礎編において校訓と学校教育目標との関係について、「学校教育目標と校訓との関係性を明確にし、体系的に目標を整理することで、学校教育活動の核として、校訓を『教育目標の後ろ盾』としている場合もあり、学校づくりの在り方として、一つの重要な方向

性を示すものと期待される。(p.1)」と述べている。校訓のある学校には、学校教育目標との関係がどのようにあるのかを、また、校訓を設けていない学校にも、校訓の是非について問いかけている。

4 学校教育目標の校訓化

この報告書がまとめられてから一定の時間が経過する。ただ、校訓をはじめ、学校教育目標をめぐる状況に大きな変化はない。

学校教育目標については、親しみやすさなどに工夫をこらすとともに、教育の本質や普遍的教育理念を盛り込むことについて怠りなく、実現をめざす教育的価値や規範などを盛り込んだものがよくみられる。

しかも、それは、短期間にたびたび修正を加えるというよりも、比較的長期にわたって掲げておく扱いが大勢を占めている。学校教育目標には余り手を加えない。これが学校の学校教育目標に対する基本的な姿勢といつてよい。

その意味で、今、起こっていることは、学校教育目標の校訓化である。普遍的な教育理念や実現をめざす教育的価値や規範などを盛り込んだ学校教育目標を長期にわたって存続させることによって、事実上、校訓と変わりのない機能と役割をもったものが、学校に存在するようになっていくということである。

すでに校訓を設けている学校においては、校訓が二つ存在する状態に、また、校訓を設けていない学校では、実際のところ校訓にあたるものはあっても、学校教育目標にあたるものが曖昧な状態に置かれているということである。

改めて、学校教育目標をどのように整え直したらよいか、校訓との関係を明らかにしつつ、新たな在り方の探求が求められていることを確認しておきたい。